



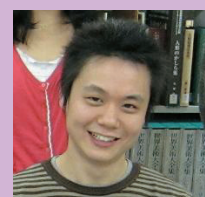
## コラム

### 招聘レポート

名前	所属	招聘期間
Bruno Hissatugu	サンパウロ大学 哲学・文学・人間科学部 写真・映像人類学専攻 修士課程	2011年10月2日～10月22日
Sonja Hotwagner	ハイデルベルク大学 クラスター 日本学専攻 博士課程	2011年10月15日～11月4日
祝 鵬 程	北京師範大学 民俗学専攻 博士課程	2011年11月4日～11月24日
Josef Antonius Kyburz	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター 教授	2011年11月10日～11月30日
康 楽	中山大学 日中比較文学専攻 博士課程	2011年11月10日～11月30日
趙 李 娜	華東師範大学 中国非物質文化遺産保護研究中心 博士研究員	2011年11月27日～12月17日
聶 友 軍	浙江工商大学 日本文化研究所 研究員	2011年12月1日～12月21日
徐 智 瑛	プリティッシュコロンビア大学 アジア学科 博士課程	2011年12月7日～12月21日

## 外国だが身近に感じる国

Bruno Hissatugu  
(サンパウロ大学)



神奈川大学非文字資料研究センターと、サンパウロ大学の日本文化研究所によって実施されているこの交流プログラムに参加できて光栄だった。

この交流プログラムは、私に鹿児島でフィールドワークを実現する機会も与えてくれた。私の現在の研究テーマはブラジルにおける日本人移民、それも主として鹿児島出身の私の母の家族の移民の歴史、記憶、アイデンティティである。そのため、鹿児島訪問は私にとって重要な意味があった。

まず、日本に到着した日からすべての面でお世話になった神奈川大学大学院生の渡邊由里恵さんに感謝したい。渡邊さんは、日本語を話すことも理解することでもできない私を助けてくれ、外国人である私が迷わずに立ち動き回るのを手助けしてくれた。

事務室の彦坂綾さんにも、日本到着前から色々と支援していただいたことに感謝している。細かい点によく気がつく思慮深い方である。同様に事務室の和田秀子さんにも支援していただき感謝している。

私の指導教員になってくれた泉水英計准教授にはたいへんお世話になった。私が希望していた以上のことについて指導していただいた。学校が終わった後もたいへん有意義な対話をしたが、話題はいつも文化人類学の分野のことだった。研究室の皆さんとも啓発的な話ができたことにも感謝したい。自分の研究の方向付けはおおむね正しいが、今後改善しなければならない点もあると感じた。写真資料を公共施設または大学などのアーカイブで

保存するための様々な取り組みや方法論を考察することもできた。

渋沢資料館学芸員の永井美穂さんともお会いできた。永井さんには、鹿児島国際大学で教鞭をとるご友人の黒瀬教授を紹介していただいたばかりでなく、ブラジルの日本人居留地に関するご自身の研究についても話をうかがった。それが私の鹿児島訪問において大いに役立った。また、永井さんと、神奈川大学常民文化研究所特別研究員の小林光一郎さんは、私の鹿児島滞在中のフィールドワークの方法論の準備にあたってもお世話になった。彼らの豊富な経験と助言のお陰で、多くのことが得られたのは幸運だった。

横浜と東京では主に3つの博物館を訪ねたが、いずれにおいても、担当者の皆さんは親切で協力的だった。

国際協力機構（JICA）の横浜国際センターでは、日系人相談センターと海外日系人協会のアドバイザーのエレーナ・ヤマガタさんが、これらの施設に保存されている日本人の海外移民に関するすべての写真資料を見せてくれた。これらの資料により、私の仮説のいくつかを確認するとともにその幅を広げることができ、たいへん有益であった。

財団法人日本力行会では、田中直樹さんが同会の写真アーカイブを見せてくれたが、これも私の当初の仮説の一部を確認するものであり、仮説の幅を広げるのに役立った。

これら2つの博物館のアーカイブでは、日本からブラ

ジルに渡った移民だけでなく、アルゼンチン、ボリビア、ボルネオ、チリ、キューバ、パラグアイ、ペルー、米国などへの日系移民に関する写真資料も見ることができた。それによって、日系移民に対する私の見方や考え方の幅が広がった。ヤマガタさんと田中さんが私の希望に積極的に対応して下さったことに感謝する。

東京都写真美術館も訪ねたが、そこで最も役に立ったのは壮大な図書室だった。この図書室では2日間リサーチをすることができたが、数ヵ月でも過ごせる気がした。

このほか、神奈川大学図書館と日本常民文化研究所図

書室も役に立った。

これら3つの図書館・図書室で、私はブラジルでは入手できない多数の有益な資料を発見した。その結果、私は自分の参考文献目録と一般知識を増やす機会を得たのである。

皆さんにたいへん寛大かつ協力的に対応していただき、私としては、第二の故郷にいる感じがした。幸運にも日本で研究する機会を与えられ、また、その機会を最大限に生かすことができたことに、本当に感謝している。

## 日本初の風刺雑誌—横浜の「名物」

Sonja Hotwagner  
(ハイデルベルク大学)



横浜の街並、人気の臨海地域、ランドマークタワー、そして日本最大の中華街を散策していると、この街の国際的な雰囲気を感じることができる。山手地区の旧外国人居留地、外国人墓地、そして有名な赤レンガ倉庫は、徳川（江戸）末期から明治初期の横浜の活気あふれる暮らしの様子を今に伝えている。

1854年、日本は開国を迫られ鎖国を解いた。その後5つの港が国際貿易のために開かれたが、その1つが東京に近い横浜である。さらに外国人居留地も作られた。イギリス人とフランス人が大半を占めた外国人居留者たちは、祖国から遠く離れた地にあっても、西洋的な生活様式と古くからの習慣を維持しようとした。彼らは地域社会で、競馬、コンサート、演劇、コーヒーパーティーなどを催し、そしてさらに新聞の発行をも始めた。ほどなくして、“Bluff（「断崖」の意）”と呼ばれる山手の外国人居留地は、日本と世界の文化交流の中心地となり、さらに近代的な「文明」を促進する役割を果たすようになっていった。山手で生まれ、日本の日常生活の中に伝えられていった目新しいものの1つに「風刺雑誌」がある。

日本の風刺雑誌の歴史を語るとき、切っても切り離せないのが、チャールズ・ワグマン（Charles Wirgman）の名前である。ワグマンは『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の特派員を務めるかわら、ユーモア溢れる評論誌『ジャパン・パンチ』を発行した。1862年に創刊されたこの雑誌は、日本初の風刺雑誌となった。

1859年6月2日、横浜は西洋人への門戸を開いた。

そのわずか2年後、ワグマンはこの新たな可能性を利用し、日本でのキャリアをスタートさせた。ワグマンはあっという間に日本の文化と社会になじんでいった。日本人女性と結婚し、日本式の服装を身にまとい、日本語をマスターした。外国人居留地という小さな世界の中で、この英国人男性の国境を越えた生活の様子は人々の注目を集めた。ワグマンは山手に暮らす当時の外国人たちから疑わしげに見られていたと、外交文書に記録されている。

ワグマンがほんの面白半分に行行を始めたジャパン・パンチは、最初の発行部数が約200部で和紙に刷られたものだった。同誌は特に日本に暮らす外国人の興味を誘い、横浜に加えて、東京、神戸、長崎といった外国人居留地や貿易地でも売られるようになった。挿絵に添えられる説明文の大部分は英語で書かれおり、西洋の読者向けに作られた雑誌だったにも関わらず、日本人の読者も引き付け、間もなく日本語版も発行されるようになった。

ワグマンの作ったこの長寿雑誌は、横浜の地元のトレードマーク、そして外国人コミュニティをつなぐ絆となった。

まったくかけ離れた文化的枠組の中に存在するヨー

